

ひとはく図鑑

セミは夏の昆虫の代表です。兵庫県には、13種類のセミがすんでいます。阪神間の市街地にも、4、5種類のセミが見られます。写真では、比較的好く見られる大型のセミを紹介しました。エゾゼミは、山地にしか見られません。阪神間では、六甲山の山上部や北摂の山々の山頂近くだけにすんでいます。

夏休みは、セミとりにチャレンジしてみましょう！セミとりに使う虫アミは、小さめのものがおすすめです。木の幹にアミをかぶせたとき、すき間が少なくすむからです。熟練者は、そっと下からアミを近づけて、飛び立つ瞬間にすくい取ります。うまくいけば、ですけれどね。

セミの羽化も、ぜひ観察してみてください。地面に丸い穴がたくさんあいているのは、セミの幼虫がいた証拠。日が暮れる頃、運が良ければ、幼虫が地面から出て歩いているのをみつけることができます。幼虫をみつけたら、木の枝（葉っぱがついている方がいい）にとまらせておきます。しばらくすると羽化がはじまります。生命の営みは感動的です。

兵庫県にすむ13種のセミは、出てくる順番にハルゼミ、エゾハルゼミ、ヒメハルゼミ、ニイニイゼミ、ヒグラシ、クマゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、エゾゼミ、コエゾゼミ、アカエゾゼミ、ツクツクボウシ、チッチゼミ。ハルゼミは4月下旬から5月に、チッチゼミは9月から10月にかけて見られます。エゾハルゼミ、アカエゾゼミ、コエゾゼミは、但馬地域の高地にだけ見られます。ヒメハルゼミは、県南部の照葉樹林に多く見られます。

八木 剛（自然・環境評価研究部）



アブラゼミ



ミンミンゼミ

そうだ、夏休みは、セミとりをしよう。



クマゼミ



エゾゼミの羽化



エゾゼミ

兵庫県立 人と自然の博物館
Museum of Human and Natural History, Hyogo
http://hitohaku.jp
hitohaku news paper 2009

学びっ!
人と自然の応援情報誌

ハーモニー65号
21巻◎Z-002A7

ひとはく新聞

TEL:079-559-2001 (ひとはくの代表番号です)
TEL:079-559-2002 (学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください)
TEL:079-559-2003 (セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です)



〒669-1546
兵庫県三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)
http://hitohaku.jp

企画展

初夏の鳴く虫と巡回展

もくじ

- ・ひとはくコラム「豊かな夏休み」
- ・ミツバネが減少しているのはなぜか?!
- ・あの人に会いたい
- ・六甲山のキノコ展を終えて
- ・進化を続ける丹波の恐竜展示コーナー
- ・ありまふじフェスティバルレポート
- ・新入館員紹介コーナー
- ・ひとはく図鑑



～ぎっちゃん君、参上!～
6/6～8/31開催

この企画展の原点は、2006年に北海道大学出版会から発行された一冊の図鑑にあります。『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』(日本直翅類学会編)は、標本が変色しやすいので、変色しないうちに写真を撮ってしまうという大変な作業の末、関西の直翅類研究者の尽力で完成しました。この偉業を称え、出版を祝って、2007年に奈良県の橿原市昆虫館が、日本直翅類学会とNPO西日本自然史系博物館ネットワークの協力のもと、特別展「バッタ・コオロギ・キリギリス」を開催しました。その後、この展示を元に、巡回できるものをまとめて、橿原市昆虫館がNPO西日本自然史系博物館ネットワークに所属する諸館に「巡回展」を呼びかけて、大阪・兵庫・滋賀・奈良の6館で順次開催することが決まりました。

巡回のメインは、日本直翅類学会監修の写真パネルで、企画展示室の大半を飾ります。生きた鳴く虫の姿を堪能できます。この鳴く虫の生態写真の合間に、伊丹市昆虫館製作の解説パネル、きしわだ自然資料館製作の解説パネルを配置します。初夏の鳴く虫コーナーには関連の写真パネルを集めてみました。

標本類はひとはく独自のもので、外国産の直翅系の昆虫18箱と、日本産バッタ目標本9箱です。

それから竹細工の鳴く虫コーナーもあります。竹細工作家・戸田和孝氏のオリジナル作品と、8/14(金)のオープンセミナー「竹細工で鳴く虫をつくろう」の優秀作品を展示します。

最後のコーナーは、昆虫生態写真家・栗林慧氏の「自然の瞬間」19点です。関連イベントとしては8/1(土)15:30から栗林氏のスペシャル講演会「鳴く虫撮影の思い出」があります。

4階の「ひとはくサロン」にも関連の楽しい展示・イベントを用意します。開催初日の6/6(土)にオープンセミナーで色塗りの体長約2.5mの巨大キリギリス(写真参照、筆者右端)が皆さんの目をひくと確信しています。

この企画展のサテライト展示として上郡町の「赤松の郷昆虫文化館」に協力頂き、「虫かごの今昔と鳴く虫文化」が同時開催されます。古い虫かごも数点お借りしました。

大谷 剛(自然・環境マネジメント研究部)

ひとはくコラム
豊かな夏休み

わたしたちの世代には、最近のように、夏休み中に外国へ行ったたりすばらしいホテルに滞在したりというような機会はありませんでした。終戦が国民学校5年生の時、それまでは戦争中の混乱が、それ以後は戦後の日本の貧しさが、子どもの生き方を支配していました。

わたしは丹波市柏原町で生まれ、育ちました。2年生の夏休み、2キロほど離れた友人のところへ毎日のように遊びに行きました。農地に囲まれ、柏原川沿いにあった彼の家へ通った日々は、幼い頃あまり丈夫ではなかったわたしにとって、健康増進のよい薬だったように、3年生からは学校を休むこともなくなりました。一人で歩いて彼の家へ行き、田んぼや柏原川の周辺を駆けまわらだけでしたが、そこにはさまざまな発見があり、それが無性に楽しいのでした。ある時は、彼のお父さんが、マクワウリを半分に割って土産にくださいましたが、果汁をこぼさないようにしっかりと支えもって帰ったものでした。その頃、ひとかけらのマクワウリがもの、ありがたさを教えてくれました。

日本が貧しかったから不幸、ということはありませんでした。子どもは幸せを、芽生えつつある生を一杯生きること、味わいます。せっかくなので、に囲まれながら、部屋の中でゲームに没頭するような子ども時代はわびしいものです。広い世界を飛びまわる遊びこそが最高の学習である、子どもも自身の体験を通して学び取ってほしいものです。

岩槻邦男
(兵庫県立人と自然の博物館 館長)